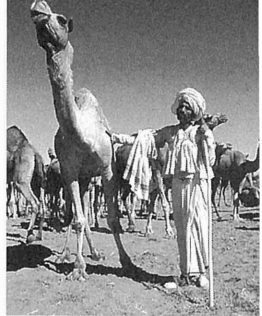


みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

織機を用いない「織り」：
ラバリによる放牧用袋の制作

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上羽, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005918



【写真1】乾燥地帯の砂礫地を数百頭のラクダを連れて移牧を行うラバリ男性（2001年筆者撮影）

「見つけた！」木の枝に袋が掛かっている。近づくと、少しぼろぼろになった袋からラクダの乳と尿の混ざった独特の匂いがした。木の下には小枝の燃えかすがある。間違いない、ラクダの移牧の通り道に違いない。ここで待てばラクダ飼いたちに逢うことができる。弾む心を落ち着かせながら、木に掛かっている袋を手にとってみる。

ここはアラビア海に面するインド西端、パキスタンとの国境沿いに位置するカッチ地方（地図1）。北部にタール砂漠があり、その影響を受けて年間降水量400mm以下の乾燥地帯で

織機を用いない「織り」

ラバリによる放牧用袋の制作 上羽陽子

ある。私の調査対象である牧畜民・ラバリ

（Rabari）は紀元前5世紀ごろ、アラビアに

現れ、11世紀ごろに中央アジアを経てインド

西北部地方（現インド・ラジャスターン州）

へ移り、その後14世紀にシンド地方（現パキ

スタン南東部シンド州）を経て、カッチ地方

へ到達し、いくつかの集団に分岐したとされ

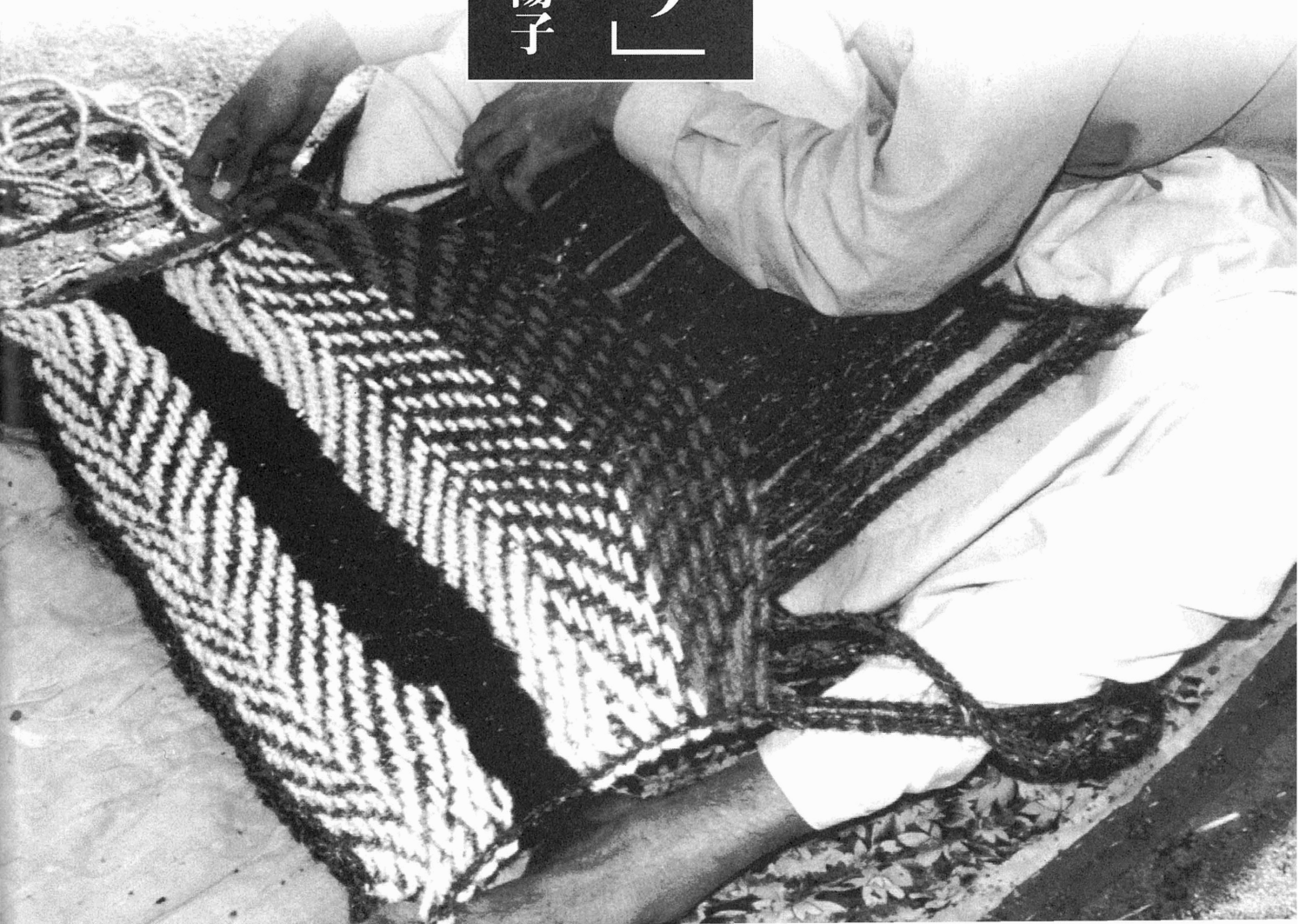
ている。現在、ラジャスターン州に1集団、

グジャラート州に11集団と広範囲に分散して

居住している。このカッチ地方にはカチ、デ

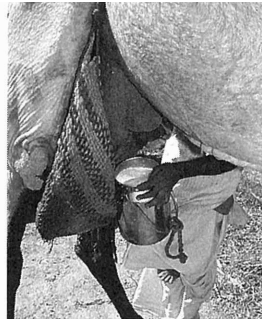
バリア、ヴァガディアの3集団が居住し、そ

の人口は約150000〜180000人（カッ





【写真3】放牧用具を入れておく袋・ダブリオ ワノ。ラクダの毛とヤギの毛を用いて紡がれた紐を使用して、ラバリの男性によって織られる。織作業には一切の道具を使用しない。(2001年筆者撮影)



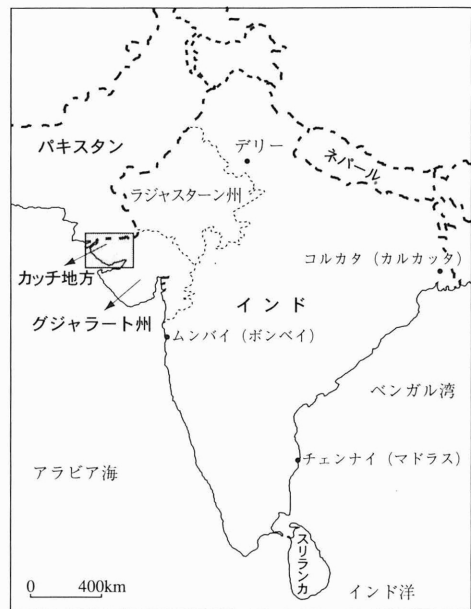
【写真2】乳当て袋を外して母ラクダの乳を搾るラバリ男性。移牧中は子ラクダが必要以上に母ラクダの乳を吸ってしまわないように乳当て袋を覆い被せておく。(2003年筆者撮影)

現在、カッチ地方に居住するラバリの約60%は特定の村に家を持ちながら、ラクダと共に1年のうち約10ヵ月間を季節的に放牧地を求めて家畜を移動させている(写真1)。

このような放牧を主な生業とするラバリの男性は、道具を一切用いないで身体のみを利用する織技術を持している(本稿では、このような身体を利用してタテ糸を張る織機を「身体機」と称する)。彼らによって織り出されるものには、ラクダの乳房に覆い被せる乳当て袋や乳当て袋を留める細帯などの放牧用具がある(写真2)。

放牧用袋・ダブリオ ワノ

チ県総人口の約1%)とされている。



地図1 インド独立後、カッチ地方はパキスタンとの国境に接することから、国防上の特別行政区になっていた。その後、1960年にグジャラート州の19県の一つカッチ県となった。

小石による糸紡ぎ作業

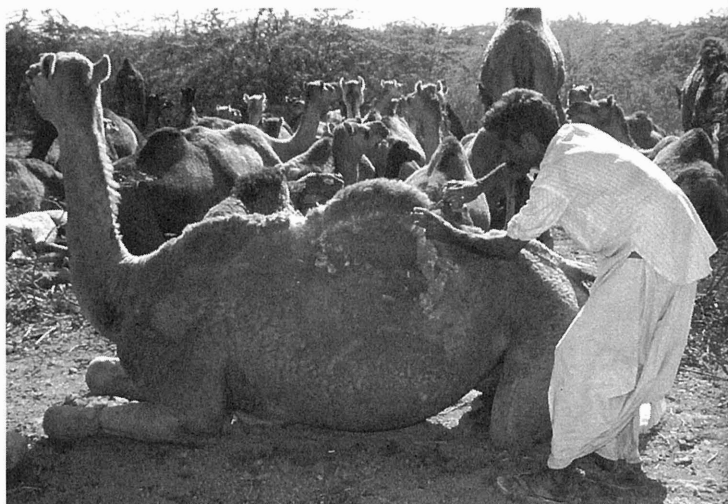
本稿では、彼らが家畜を移動させている間、放牧用紐や紅茶の葉、砂糖、飲み物用の食器、煙草の葉、火付け用の石や綿花などを入れている放牧用袋を取り上げ、その制作工程を紹介する(写真3)。この袋はラバリの伝統的な飲み物用の真鍮製の食器名「ダブル(dabr)」を入れる袋「ワノ(wano)」という意味で「ダブリオ ワノ(dabrio wano)」と呼ばれ、ラバリの男性のみによって制作されている。

通常、放牧用袋の制作にはラクダの毛、または山羊の毛が用いられる。ラバリの男性は自らが飼育するこれらの家畜の毛を刈り取り、自分たちで糸を紡いで放牧用具の制作を行っている(写真4、5)。

ラバリの糸紡ぎ作業は通常、他地域で見られるような紡錘車を使用せず、紡ぎの回転のための「はずみ」に小石と小枝を用いるだけである(写真6)。ラバリでは移動中でも容易に糸紡ぎを行うために、ほぐした繊維を紐状にして何重にもたぐりよせて輪奈状にしている。これはヴィディ(vidi)と呼ばれ、これを右腕に通して糸紡ぎ作業は行われる(写真7)。作業はまず小石を「錘り」に右回転させ、ヴィディの端から繊維を引きだして糸に紡いでゆき、順次、撚り上がった糸を石の上に巻き取っては、その都度糸止めとなる小枝に絡めて作業が続けられる。そして小石の巻き付けた糸がある程度までたまると、止め棒となる小枝を引き抜き、巻き付けた糸の上を一定の定まった方向に位置をずらしながら、小枝を置き、これを支点としながら糸紡ぎがなされてゆく。このように小枝を少しずつずらすことによって整った球状に糸を巻き付けることができ、また回転のなめらかな錘



【写真4】飼育しているラクダの毛を刈り取るラバリ男性。ラクダの毛は、コブ周辺部分が柔らかく繊維素材として優れている。(2003年筆者撮影)



【写真5】飼育しているヤギの毛を刈り取るラバリ男性。ヤギの毛の色は黒色、白色、茶色などがあり、春ごろにまとめて刈り取り、同じ色同士に選り分けておく。(2001年筆者撮影)



【写真9】 タテ糸保持紐（茶色）の燃りの間にタテ糸（黒色）を折り返しながらか通して、両足の親指に引っ掛ける。タテ糸の手前の輪部分にタテ糸保持紐を通して（2003年筆者撮影）



写真7

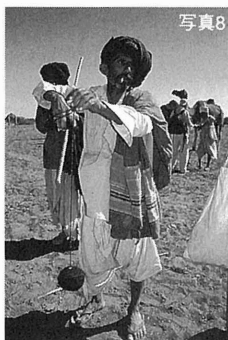


写真8



写真6

【写真6】 糸紡ぎに用いられる小石と小枝。巻き付けた糸が解けないように小枝に糸を引っ掛けて作業を行う。（2001年筆者撮影）【写真7】 糸紡ぎ作業中のラバリ男性。繊維を平行に引き揃え、太く柔らかい紐状の束を輪状にしたヴィディを右腕に通している。（2001年筆者撮影）【写真8】 移牧中に糸紡ぎを行うラバリ男性。紡いだ糸を球状に巻き付けて、この巻糸自体を回転の「はずみ」として用いている。（2001年筆者撮影）

放牧用袋の織準備

織準備は、まず自らで紡いだ糸を燃り合わせて双糸にし、これをさらに2本燃り合わせた4本燃りの紐を必要量用意することから始める。そして、この4本燃りの紐をさらに2本燃り合わせて8本燃りの太い紐を制作し、タテ糸保持紐として用いる。

制作者は投げ足の姿勢で織作業を行う。まず、タテ糸保持紐の端から30cmほどの所の燃りの間にタテ糸となる双糸2本を燃り合わせ

りになってゆく（写真8）。

つまり、紡いだ球状の巻糸そのものが紡錘の役目を持つている。そして糸紡ぎが終わると、小石は再び地面へと戻されるのである。ラバリの糸紡ぎ作業は、これといった道具を使用しない素朴な技術なのである。

織作業

タテ糸の準備が終わると織作業を行う。足の左親指の方からタテ糸を2本おきに指で揃い、準備しておいたヨコ糸となる紐を通してゆく。通常、ヨコ糸は4本燃りの紐を用いる。最後のタテ糸までヨコ糸を通すと、指でヨコ糸を弾きながらタテ糸へ打ち込む。今度は今来た方向へ、先程揃ったタテ糸より1本ずれるように、2本おきにタテ糸を揃いながらヨコ糸の紐を通してゆく（写真11）。そして、またタテ糸の端までくると、指でヨコ糸を弾きながらタテ糸へ打ち込む（写真12）。

ヨコ糸が2往復すると、今度はタテ糸の端で折り返すのではなく、矩形を作ったタテ糸保持紐の燃りの間にヨコ糸を通して折り返す。以後、端までくると、このタテ糸保持紐の燃りの間にヨコ糸を通して固定してゆく（写真13）。このようにタテ糸保持紐の燃りの間にヨコ糸を通すことで、タテ糸とヨコ糸の間にすき間ができて固定することが可能なの

である。

そして、タテ糸を1本ずつずらしながら、2本おきにタテ糸を揃い、織り進めてゆく（写真14）。ある程度織り上がると、タテ糸を1本ずつ引張りながらヨコ糸の密度を高くしてゆく。また、ダブリオ ワノに用いられる主な文様は、ラバリの伝統的文様のジグザグである。時にはヨコ糸を途中で変え、このような縞子組織によって表現してゆく（写真15）。タテ糸保持紐の手前まで織り上がると（写真16）、親指と膝から紐を外し、袋としての形を整えてゆく。織り上がった矩形をタテ方向に半分に折り重ね（写真17）、袋の底部分からたるんだタテ糸を1本ずつ引張り張って形を整えてゆく（写真18）。この時には尖らせた木の枝を使用する。形が整うと、端を縫じてから、さらに袋状の形に整えるために、この袋の中に石を入れて、2、3日間木にぶら下げておく（写真19）。

織機を用いない「織り」

この放牧用袋の織作業は単純な制作工程に見えるが、私は幾つかの興味深い点を観察した。まず、この織作業では、織の最低条件であるタテ糸を平行に並べて固定させる、均一な張力でタテ糸を張ることができ、タテ糸に対してヨコ糸が垂直に交わっている、タテ糸を張った状態で両手が使えるなどといったことが揃っているということである。つまり、この「身体機」による織技術はタテ糸を1本ずつ揃い上げる、綜統発明以前の技術の一つなのである。またラバリの「身体機」で制作される繊維素材は柔らかく、太い紐を使用し、タテ糸の本数が少ないことが条件となる。

さらに、特に注目したいことは、この放牧用袋の制作工程において、ラバリの男性には

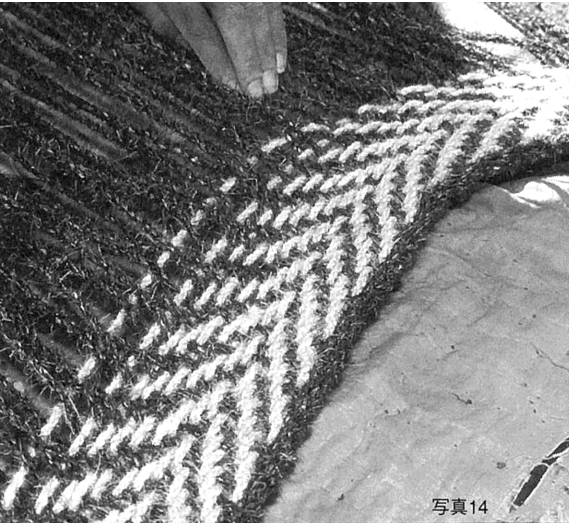


写真14



写真12



写真13



写真11



写真10

【写真10】全てのタテ糸をタテ糸保持紐に通して平行に固定した状態。(2003年筆者撮影)【写真11】タテ糸を指で揃え、ヨコ糸となる白い紐を通してゆく。(2003年筆者撮影)【写真12】タテ糸保持紐を右手で引っ張り、左手の指でヨコ糸を打ち込んでゆく。(2003年筆者撮影)【写真13】タテ糸保持紐の端の間にヨコ糸を通す。このことによってヨコ糸が固定する。(2003年筆者撮影)【写真14】タテ糸が1本ずつずれるように、2本置きにタテ糸を揃えて、織り進めてゆく。(2003年筆者撮影)【写真15】ヨコ糸の色を変えながら、ラバリの伝統的なジグザグ文様を表現している。(2003年筆者撮影)【写真16】タテ糸保持紐まで織り上がった状態。(2003年筆者撮影)【写真17】足からタテ糸保持紐を外し、タテ方向に半分折り重ねた状態。(2003年筆者撮影)【写真18】タテ糸のゆるんだ部分を1本ずつ引っ張って、袋状の形に整えてゆく。(2003年筆者撮影)



写真16



写真15



写真18



写真17

タテ糸とヨコ糸という意識が明確にあるということがある。彼らは「織る」という動作を「ヨコ糸をタテ糸の上と下に通す」と説明している。一方で彼らは編技術も保持しているが、この編技術と織技術とは明確に区別をしている。このことは今後、筆者が編技術から織技術への技術的発達の比較検討を行ってゆく際に、制作者の意識を探る鍵になるのではと考えている。

しかし、このような技術を調査するにはいくつかの困難が存在する。例えば、ラバリの男性による放牧用具の制作作業は、村や幹線道路から遠く離れた移牧中に行われることが多い。そのため、カッチ地方を訪れる旅行者はラバリの制作作業を見かける機会が極端に少ないのである。運良く作業を見かけることがあっても、ラバリの外部の人への警戒的な性質から、その作業工程を何時間も観察し続けることは難しいのである。

また、男性の制作する放牧用具は家畜に直接使用することを目的として自家用に作られている。そのため、観光客や研究者が村々を訪れた際に見かける放牧用具は、泥や埃にまみれて家の片隅に置かれた状態であり、注目されることがなく、手に取られることも少ないのである。

ラバリ社会では男性と女性の領域が明確に区別されている。男性が女性の領域である刺繍作業の場所に入れないことと同様に、女性は男性の領域である放牧用具の作業場所に入ることができない。そのため、ラバリ女性にとっても完成した放牧用具を見ることがあっても、その制作工程については明らかでないことが多い。

私はラバリの調査を始めてから2年後に、それまで調査の都度に寄宿していたラバリ家

庭で、ラバリの娘と認めてもらえることができた。このことにより、外部の人々に対して閉鎖的なラバリの男性とも容易に接触することができるようになったのである。

現在でもラバリのように移牧や放牧を行っている少数民族集団の中には、ラバリと同様に編技術から織技術への技術的発達を探るための重要な過渡期的技術が未だ残されていると筆者は考えているため、さらなる追加調査を重ねてゆく予定である。

(大阪芸術大学非常勤講師／うえは・ようこ)

【注1】遊牧は放牧生活を基盤として、全生活形態が移動の上に成り立っている遊動的な放牧である。遊牧は家族やすべての財産などを持って移動するが、それに対して移牧は主体を定住的なところに残り、一部の人が家畜を連れて放牧生活を行うことである。【松原正毅19984・293】。この定義にラバリをあてはめると、14世紀にインド西部に到達するまでは遊牧を行い、その後移牧を行うようになったと考えられる。

【参考文献】

FRATER, Judy

1998 Threads of Identity. Mapin Publishing, Ahmedabad.

松原正毅

19984 「座談会 イスラム世界の放牧民」永田雄三・松原正毅編「放牧民」東洋経済新報社、東京。

上羽陽子

2002a 「ラバリの手工芸——その技術的考察と社会的認識」大阪芸術大学大学院(博士論文)。

2002b 「編み」から「織り」へ——放牧民ラバリの手工芸——国立民族学博物館監修「季刊民族学」100:60—79、財団法人千里文化財団、大阪。

【写真19】完成した放牧用具袋を肩に掛けるラバリ男性。(2003年筆者撮影)

